

断章 アイヌ語地名研究

②

文化四年（一八〇七年）、近藤重蔵は、幕吏として宗谷までの巡検の帰途、天塩川を遡り、塩狩峠から比布の棚瀬山へ出て、ここから石狩川を丸木舟で下り、比布の番屋で一泊、翌日は更に石狩川を下り、忠別川との合流点下流左岸にあった番屋で宿泊する。写真①は、その時の近藤重蔵直筆の野帳で、現存する旭川最古の記録である。

日本語にないアイヌ語の発音トウ(チ)をトヤツと表記した最上徳内の薫陶を受けた近藤は、天塩川でツンベツボなどの野帳でも正確なアイヌ語地名の表記をしている。今から二百年前のことである。

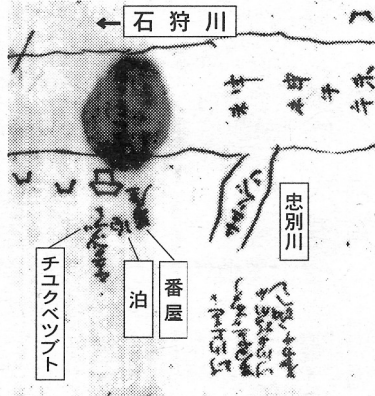
文化四年（一八〇七年）、近藤重蔵は、幕吏として宗谷までの巡検の帰途、天塩川を遡り、塩狩峠から比布の棚瀬山へ出て、ここから石狩川を丸木舟で下り、比布の番屋で一泊、翌日は更に石狩川を下り、忠別川との合流点下流左岸にあった番屋で宿泊する。写真①は、その時の近藤重蔵直筆の野帳で、現存する旭川最古の記録である。

近藤の記録で先ず驚かされたのが比布川口に番屋一棟、萱倉三棟、番人一人という記述があったことである。また、掲載の写真①の部分では、忠別川を「チユクベツ」と明記、「此川上遠シ 番ヤ三ヶ所アリ 此川上枝川ヨリトカチへ越へシテ、忠別川上流にも番屋が三ヶ所ある」と記述。番屋とは、松前藩主または知行主が、アイヌの人た

ちとの獣皮・干鮭等の交易のために設置した建物。伝間宮林蔵作成図にも、石狩川に二カ所、忠別川筋に二カ所の番屋が記載されている。上川が天産の宝庫の地であった証でもある。

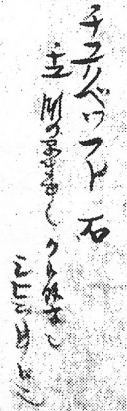
近藤の踏査から五十年後の安政四年（一八五七年）に松浦武四郎が旭川を調査する。その時の調査基地も上川で唯一の番屋で、近藤の時と違い、忠別川を少し溯った左

— 忠別川のアイヌ語名 —



写真① 近藤重蔵「石狩川筋図」川筋上の「未申」などの干支は、石狩川の川筋の方向、楕円の墨跡は距離を表わす。幅約16センチの巻紙に記載する上での工夫である。

写真② 松浦武四郎「已第一番」



岸（忠和三系七丁目付近）にあった。わずかに五十年後であるが、近藤が宿泊した比布の番屋や忠別川上流の番屋の記述は全くない。

さて、アイヌ語が分かり、実際に秋の・魚・鮭が盛んに上る川だったので命名されたのである。

ところが、松浦武四郎が、「チユクは汐早き川と云ふ事のよし也」と書いたばかりに、松浦武四郎研究の権威・秋葉實氏が、『松浦武四郎上川紀行』で、忠別川「チユウベツト」

「河流早い川」松浦説（知里説）と書かれた。チユクには、「河流早い」の意味はないし、写真②の松浦の野帳のように、情報提供者のシヒラ（シヒラ）は、「チユウ・瀬の早き事也。クは餘字也。」と言ったのである。チユクは汐早き川は松浦武四郎の誤記で、「忠別川」チユウベツト「河流早い川」松浦説は、将来に禍根を残すので、誤りであることを明記させていた。

高橋基・アイヌ語地名研究会幹事（毎月第一週に掲載します）